

エジプト文明を掘る (2)

早稲田大学のエジプト調査の歩み

吉村 作治

1987年は、私たち早稲田大学古代エジプト調査室の30年に至る調査の歴史について重要な年となった。

1986年12月翌年1月までルクソールでクルナ村墓群調査とマルカタ王宮調査を行なって私がカイロにもどってきた時、当時の考古庁長官故アハド・カドリー長官(1990年没)から日本もギザ地区で調査をしないかというお誘いがあったのだ。1986年よりフランス隊は、2人の建築家の発案でギザの大ピラミッド内に隠された財宝の間があったことをマイクログラビメーター(偏差重力計)によってつきとめたと発表し、世界的ニュースとなっていた。その真偽でエジプト考古庁が2分され、現地の新聞も連日このニュースでもちきりだったのだ。私たちにはどうい関係のあるものとは思えず、静観し情報を考古庁関係者からもらっていた。ところが、フランス隊が部屋がありそうな通称水平通路といわれているところの西壁を電気ドリルであけてしまったことで事態が急展開してしまったのである。人類の遺産大ピラミッドに穴をあけたということでフランス隊は内外の非難を浴び、遂にこのプロジェクトはフランス隊だけの独占プロジェクトにしておくと今後どういう事態が起こるかかわからないということで、国際コンソーシアム方式に変えられた。そこでその中に日本すなわち早稲田隊も入らないかという話があったというわけだ。「日本はモダンテクノロジーの先進国です。その先端技術を使って今懸案となっているギザの真実に挑戦してみませんか」というのが、カドリー長官の言葉であった。

私たちは10年も前から地中にひそんでいる遺跡を物理的手法で探れないものかと、我大学の理工学部資源工学科の専門家と研究を開始していた。第一に、電気探査法を試したが、砂漠の中の水分が稀薄な条件下では電気がうまく移動しないため不成功に終わった。次に電磁波地中レーダー装置を試そうとしていたところなので、カドリー長官の誘いを受けたのである。

長官はなぜか急いでいた。「では2月に始めて下さい」1月中旬のことである。ここで躊躇したら、チャンスの女神は2度と微笑んでくれない。そう考えた私は電磁波地中レーダー装置を開発していた友人、登内正治博士に急ぎ準備を依頼し、エジプトに戻った。エジプトにはカドリー長官の要請を受け、フランス、アメリカ、ドイツ、アルゼンチンなど、ギザ周辺で調査をしている関係者たちが、続々と集まっていた。長官が急いでいたわけは、なるべく早く国際的な調査団を結成し、調査を開始することで、エジプトの反政府系マスコミのフランス隊の穴あけスキャンダルをかわすことにあったのだと、その時わかった。

私たちはまず、電磁波地中レーダー装置がいかにくぐれているかを長官の目の前で知ってもらうことから始めた。砂漠のなかに溝を掘り、そこにツボや石板、金属などを埋め込み、その上を電磁波地中レーダーを通し、モニター上でその存在の確認を行なうことであった。長官はあまりの正確さに驚きの声を発し、「ブラボー、ヨシムラ」と言ってくださった。それからスフィンクスの前庭部、前足の周囲、胴部などの周辺を電磁波地中レーダーで探査し、前庭部と左前足のひじの近くに未知の空間を、また胴部の下を断層が通っていて、これはかなり危険であることなどをレポートにした。次いで太陽の船博物館の西側に存在が信じられていた第2の太陽の船のピットをその上部のピラミッド健造当時造られた周壁上とその前後の探査から確認した。これは同年10月にアメリカのナショナル・ジオグラフィック社をスポンサーとする調査隊によって、ドリルで穴をあけられ、ファイバースコープで写真を撮られ存在の確認がされたのだが、私たちのレポートが考古庁の専門委員会で認められていたからドリルで穴をあけても世論は動かなかったのである。

さらに、大ピラミッドの内部を探査した。フランス隊の暴挙といわれている通称水平通路をまず探査し、フランス隊の探査結果が正しいことを確

認し、通称女王の間の北壁西端部の壁体の裏に約30メートルの未知の通路発見した。これは水平通路側西壁からも確認が行なわれたので、間違いのないのだと考えられ、考古庁に女王の間の北壁西端部の発掘を申請したが、再度のマスコミ攻勢を回避するため許可はおりなかった。残念なことであったが、例え政治的なものとはいえ、エジプト国民の理解が得られないまま敢行すれば国際問題となるので、あきらめた。

さて以上の成果をデータを基にカドリー長官にレポートすると長官は直に、考古庁を核にエジプトの科学者を集め、「科学委員会」を開催し、以上の結果を検討してくださった。その結果、電磁波地中レーダーの基礎実験データの信憑性の高さから、これらの結果を受け入れる旨の報せを受けた。このため世界中のマスコミに取り上げられ、一躍世界的規模で私たち早稲田隊が認められることになったのである。まさしく私たちの飛躍の年といえる。5月にはフランスのバリで国際シンポジウムに招かれ、12月にはカイロで国際ギザシンポジウムが開催され、各国の探査結果の報告とその成果の討論が行なわれ、私たち早稲田隊もメインスピーカーとしてノミネートされた。まさしく国際エジプト学会にデビューしたと言っても過言ではないだろう。私たちの探査報告書は各方面から欲しいとのリクエストが来て、それに対する数多くの評論などが直接、間接を問わず寄せられた。その中には、オカルティックなものや、自分の売り込みのためのものも少なくなかったが、大方は好意的なものも多く、デビュー間もない新人としての私たちの胸をほっと、おろさせた。

こうして嵐のような1987年が過ぎ、1988年になると、従来から進めていた調査、ルクソール西岸クルナ村墓群調査や、マルカタ王宮調査も成果を出してきたため、資金的にも、人員的にも今までの体制ではやっていくことが、難しくなった。そのため大学当局と協議の上、嘱託研究員制度を認めてもらい、対外的な寄付金を制度化し、企業募金を開始した。幸い日本の経済は、今のように低迷しているところまでいっていなかったのと、良いチャンスに恵まれ調査室の規模拡大は無理なく行なうことができた。ところが、カドリー長官が文化大臣と行政の方針の違いから考古庁の長官を辞任してしまったために、エジプト考古行政は一次的に逆走し、ギザの国際コンソーシアムは解体してしまい、私たちもギザから撤退せざるを得な

くなってしまった。すなわちギザ地区の調査は全ての国に対し、凍結されてしまったのである。

私たちはプロジェクトチームを組んで始めたので、ギザ地区が解放されるまで、ピラミッド・プロジェクトチームを近辺のピラミッド調査にあてることとし、その地区としてギザから10キロ南へ行ったアブ・シール地区をあてた。また、職を辞したカドリー長官を早稲田大学文学研究科の客員教授として招聘し、大学院生の教育を強化した。しかし残念ながら、同長官は1990年には癌のため、亡くなられてしまった。エジプト政府にとっても、世界のエジプト学会にとっても、私たち早稲田大学古代エジプト調査隊にとっても、エジプト考古学ファンにとっても、大きな大きな衝撃であった。カドリー長官は自ら収集したエジプト学関係の図書を私たちに生前寄贈して下さり、自らのライフワークともなるべく、「エジプト考古学史」を癌の病と闘いながら書きつづって下さった。それを今私たちの自主ゼミの教科書として、使わせていただいている。

とは言っても、私たちは前に進むしかない。そんな落胆の私たちに朗報が届いた。1989年の秋、王家の谷西谷にあるアメンヘテプ3世王墓の調査許可がおりたのである。私たちが1974年に発見したマルカタ南魚の遺跡の健造主が、アメンヘテプ3世であったこと、また王の住居であるマルカタ王宮の調査を手掛けたことで、どうしても王墓を調査したかったのである。このことは亡くなった故川村喜一教授も強く願望していたこともあり、この許可はとても嬉しかった。いい時はいいことが重なるもので、発掘調査の資金援助を申し出てくださった企業も現われ、王家の谷西谷、アメンヘテプ3世王墓調査は、1989年12月より開始された。

ツタンカーメン王墓が1922年11月に発見されて以来70年あまりにわたって、王家の谷から新しい王墓が発見されていない。そこで我々はアメンヘテプ3世王墓周辺を物理探索し、新しい王墓発見の快挙をあげようと、計画を定め実行に移ることとした。1990年から93年にわたって、電磁波地中レーダー探査だけでなく、磁気探査、偏差重力探査、衝撃波探査、MH電気探査などを使用し、王家の谷西谷の物理探索を行なったのである。この成果を踏まえ1994年より王家の谷西谷で発掘調査を開始したのであるが、それは次回のお楽しみということで今回はここまで。 (続く)

(よしむら さくじ 早稲田大学)